

学生による授業評価と自己評価との関連¹⁾²⁾
ゲストスピーカーによる1回限りの講義を対象として

牧野幸志

**The relationship between student ratings of teaching
and student self-ratings.
Student ratings of teaching for a single lecture by a guest instructor
Koshi Makino**

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship between student ratings of teaching and student self-ratings for a single lecture. One hundred and thirty three undergraduate students took part in a survey by completing a questionnaire. The results are as follows: (1) "Student ratings of teaching" were positively correlated with "student self-ratings". (2) There was no difference between males and females in "student ratings of teaching" and "student self-ratings". (3) The "content analysis" of impressions for the class showed that students expected teachers to make the class contents easy to understand, useful, and connected to everyday life. These findings strongly supported Makino (2001a, 2001b).

Key words : student ratings of teaching 学生による授業評価, student self-ratings 学生の自己評価, a guest instructor ゲストスピーカー, a single lecture 1回限りの講義.

問 題

近年、日本の大学においても、授業評価が頻繁に行なわれるようになってきている（井上，1993；牧野，2001a，2001b，2001c；松田・三宅・谷村・小嶋，1999；三宅，1999；大槻，1993；安岡・高野・成嶋・光澤，1986；安岡・吉川・高野・峯崎・成嶋・光澤・道下・香取，1989a，b）。しかしながら、その一方で、授業を評価する材料として学生による授業評価を使用することを疑問視する意見も多く存在する（大槻，1993；住田，1996）。学生による授業評価が問題視される原因には、学生による授業評価の妥当性と信頼性の問題がある。授業にあまり出席していない学生が、その授業を評価することに対しては疑問が残

¹⁾ 本研究の一部は、平成13・14年度文部科学省科学研究費補助金（奨励研究(A)：課題番号13710092）の助成を受けた。

²⁾ 本研究の調査をまとめるにあたり、高松大学 コミュニケーション・サークルのみなさまに協力をいただきました。記して感謝いたします。

るであろうし、学習態度がよくない学生や学生意欲が低い学生が授業を酷評する場合には、その評価の信頼性は低いものとなるであろう。さらに、単位取得が容易であることが予想される授業、あるいは、先輩などの情報により知らされている授業の場合には、学生による授業評価が高くなる可能性が十分に考えられる。このような理由により、学生による授業評価を導入している大学においても、その評価は教員の勤務評定に使われるというよりも、自己点検評価に使われることが多かった。

日本では、アメリカにおける授業評価に関する研究（e. g., Elmore & Pohlmann, 1978 ; Feldman, 1989 ; Greenwood & Ramagli, 1980）に基づき、1980年代以降、授業評価と自己評価、成績などとの関連を検討した研究がみられるようになった。また、1990年代に入ると、「大学生の学力低下」、「大学全入時代の到来」などを背景に、授業の改善を目的とした授業評価も行われるようになってきた。安岡他（1986）、安岡他（1989a, b）は、学生の授業評価と成績との関連、自己評価と学生による授業評価との関係は低いことを報告している。松田他（1999）は、学生による授業評価と自己評価、授業選択態度、及び成績との関連を検討している。それによると、自己評価は学生による授業評価と高い正の相関を示した。また、明らかに成績の悪い学生は授業評価が低い、女性の方が男性よりも授業評価が高い、という結果が報告されている。松田他（1999）の質問項目を参考にして調査を行なった牧野（2001a, b）においても、概ね松田他（1999）を支持する結果が得られた。自己評価と授業評価の間には比較的高い正の関連がみられた。授業評価と満足度との間にも強い正の関連がみられ、授業評価が高い学生は満足度も高かった。また、自己評価と満足度、成績との関連については、講義中の学習態度に関する自己評価が高い学生は、満足度も高く、成績も良いことが明らかとなった。

さらに、牧野（2001c）は、多変量解析を用いて、授業評価のどのような要因、あるいは、自己評価のどのような要因が授業の総合評価、学生の授業への満足度に影響を与えるかを検討した。また、どの要因が最も授業評価に対して影響力を持つのかを検討した。その結果、学生は、「授業内容が日常生活と関連している、授業がわかりやすい、授業に興味をもてる」などの授業の内容と「教員が学生の意見や質問に答えてくれた」などの担当教員の授業態度を判断材料として、総合的な判断を行なっていること、つまり、満足を感じていることが明らかとなった。また、自己評価については、講義中に積極的に学習に取り組んだ学生は、総合的な授業評価も高く、成績も良いことが明らかとなった。さらに、教員の特性と学生の満足感、成績との関連を調べたところ、授業中の教員の熱意、学生が

ら教員への信頼は、学生の授業への満足度に大きな影響を及ぼしていた。教員の熱意が感じられるほど、教員を信頼できるほど学生は授業に満足していた。一方、教員の熱意と信頼は、学生の成績には一切関連していなかった。

ところで、従来、授業評価は、14回（半期の場合、14回の授業、1回の試験）行なわれる授業の後半、あるいは、最終回に実施されてきた（牧野、2001a, b；松田他、1999；三宅、1999）。受講生である学生は、最大14回（半期の場合）の各授業を総合して、授業評価を行なうよう指示される。実際には、各受講生により、出席回数は異なり、各学生は自分が受講した各授業を総合して、評価を行なっている。したがって、厳密に言えば各受講生により判断基準となる授業の回数が異なるし、受講回数の非常に少ない学生が評価を行なうことは、評価される教員にとっては問題となってくるであろう。そこで、本研究では、1回限りの講義を対象として、授業評価と自己評価との関連を検討していく。そうすることにより、対象となる授業がより明確となる。また、一般的に、授業評価は、単位認定者である担当教員により行われることが多い。たとえ、「実施する授業評価は、成績には一切関係しない」という教示をしたとしても、調査用紙が記名式である場合には、学生は自分が行なう授業評価が成績評価に影響を与えるのではないかと懸念するであろう。特に、授業評価、自己評価と成績との関連をみる場合には、記名してもらう必要があるために、学生の率直な意見を聞くことが難しい。この点を改善するため、本研究では、1回限りの講義を行なうゲストスピーカーの授業を評価対象とし、授業評価の実施者を本来の授業担当教員とした。こうすることで、授業の実施者と授業評価の実施者を明確に区別することが可能となる。

本研究は、ゲストスピーカーによる1回限りの講義を対象とし、学生による授業評価と自己評価との関連を検討することが第1の目的である。本研究のゲストスピーカーは、牧野（2001a, 2001a）と同様であり、いずれの研究においても高い総合評価を得ている。総合評価において高い評価を得ている授業が、1回限りの講義においても高い評価を得られるかを検証していく。また、授業評価、自己評価に男女差がみられるかを検討することが第2の目的である。従来の研究（松田他、1999）では、女性の方が男性よりも授業評価が高いことが報告されている。しかしながら、授業評価が非常に高い場合には男女により差がみられないのではないかと予想される。さらに、授業の感想の質的分析を行ない、学生が授業にどのようなことを求めているのか、あるいは求めているのかを知ることを第3の目的とした。

方 法

対象授業と被調査者

平成13年度学部専門科目「産業心理学」(学部2年生対象)の6月22日金曜日(3校時)の授業を対象とし、その受講生を被調査者とした。6月22日の授業は、外部からのゲストスピーカーによって行なわれた。ゲストスピーカーは30代男性教員である著者であり、授業の時点での教育歴は1年であった。講義のテーマは、「職場内のコミュニケーション」であった。講義は、パソコンの画面をスクリーンに映し出し、教科書を用いずに行なわれた。出席はとられていなかった。被調査者は愛媛県内の私立M大学の学生133名(男性50名、女性83名)であった。

質問紙の構成と成績

学生による授業評価 当該の授業の評価を「非常に悪かった」～「非常に良かった」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど当該の授業に対する評価が高いことを示す(1点～5点)。

学生による自己評価 当該の授業中の自分の態度を「非常に悪かった」～「非常に良かった」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど当該の授業中の自分の態度がよいことを示す(1点～5点)。

授業の内容分析 当該の授業を受けた感想を自由記述で回答を求めた。その感想を、4名の評定者(男性2名、女性2名、全員20歳)が「授業内容を高く評価しているもの」、「授業内容を低く評価しているもの」、「どちらでもないもの」に分類した。なお、4名の評定者は筆者の大学の学生であり、授業担当教員、受講生の情報は全く与えられず、分類を行なった。

その他に、「今日の授業で理解が進んだ点」、「今日の授業で理解ができなかった点や質問」を自由記述で回答を求めたが本研究では分析の対象としなかった。

手続き

平成13年度前期の「産業心理学」の1つの授業を対象に調査を行った。調査は、毎回、本来の授業担当教員が行なっている授業へのアンケートの形式で行なわれた。調査は平成13年6月22日の授業の終了時10分程度を用いて、無記名でおこなわれた。調査の実施者は、本来の授業担当教員であり、被調査者によるゲストスピーカーへの評価に影響が出ないよ

うに配慮した。

結 果

対象授業の評価，受講生の自己評価

対象となった授業の学生による授業評価，学生による自己評価の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。授業評価は，4.67点（得点範囲 1 ～ 5 点）であり，非常に高かった。また，標準偏差は非常に小さかった。受講生の自己評価も4.16点（得点範囲 1 ～ 5 点）であり比較的高かった。

学生による授業評価と自己評価との関連

学生による授業評価と自己評価との関連をみるために，相関分析を行った。その結果，授業評価と自己評価との間には，弱い正の相関（ $r = .37, p < .01$ ）がみられた。自己評価が高いほど，授業評価が高かった。つまり，授業中の態度が良い学生ほど授業を高く評価していることがわかる。

次に，授業評価と自己評価との関連をより詳細に知るため，自己評価の高さにより授業評価が異なるかを検討した。被調査者を自己評価の得点の高低により分類した。自己評価得点の上位30%を高群，下位30%を低群とし，授業評価得点に対して t 検定を行った（Table 2）。その結果，授業中の自己評価が高い学生は，低い学生に比べて，授業評価得点が高かった（ $t(80) = 3.99, p < .01$ ）。つまり，授業中の態度が良い学生は，比較的良くない学生と比べ，授業を高く評価していた。

Table 1 対象授業の評価，受講生の自己評価

	授業評価 ^{a)}	自己評価 ^{a)}
平均値 (標準偏差)	4.67 (0.53)	4.16 (0.81)

^{a)} 評定値は 1 ～ 5 の値をとりうる（3 が「ふつう」に相当）。
得点が高いほど評価が高いことを示す。

学生による授業評価と自己評価の性差

学生による授業評価と自己評価が男女によって差があるかを詳細に検討するため、性別による t 検定を行なった (Table 3)。その結果、授業評価に関しては、有意差はみられなかったが傾向差がみられた ($t(130) = 1.81, p < .10$)。女子学生 ($M = 4.73$) のほうが男子学生 ($M = 4.55$) よりも授業評価が高い傾向がみられた。自己評価には、男女差はみられなかった (*n. s.*)。つまり、授業評価と自己評価において、男女差はほとんどみられなかった。

Table 2 自己評価の高低による授業評価の差異

	自己評価	
	低群 $M = 2.90$ $n = 29$	高群 $M = 5.00$ $n = 53$
授業評価 (標準偏差)	4.38 (0.68)	< 4.91 (0.30)

注) 不等号は、評定値間のその方向に有意差があることを示す
(t 検定, $p < .05$)

Table 3 学生による授業評価, 自己評価の男女比較

	男子学生 $n = 49$	女子学生 $n = 83$
授業評価 (標準偏差)	4.55 (0.61)	4.73 (0.47)
自己評価 (標準偏差)	4.14 (0.81)	4.17 (0.82)

授業の内容分析

調査用紙の最後に設けられた「感想」（自由記述）の内容の分析を行なった。回答者によって書かれた感想を、4名の評定者（男性2名、女性2名、全員20歳）が、「授業内容を高く評価しているもの」（以下、高評価と表記）、「授業内容を低く評価しているもの」（以下、低評価と表記）、「どちらでもないもの」（以下、どちらでもないと表記）に分類した。4人の評定者のうち、3人の評定者の意見が一致した回答（一致率75%以上）を有効な回答とした。その結果、高評価と判定された回答が117名（95%）、低評価と判定された回答が6名（5%）、どちらでもないと判定された回答（0%）はなかった（Figure 1）。評定者の意見が分かれ、有効な回答とみなされなかった回答が10個みられた。また、授業内容を高く評価している117名の回答の内容を、その理由別に分類してもらった。1つの回答にいくつかの理由が書かれていたものは、複数回カウントした。その結果、高評価には、次のような理由が挙げられていた（Figure 2）。「授業中に具体的な例を出してくれる」（36件）、「授業内容が日常生活と関連している」（33件）、「授業内容がわかりやすい」（30件）、「授業内容が将来役立つ」（26件）、「学生も参加できる授業である」（19件）など。その他に少数ではあるが、「先生がおもしろい、先生の話し方がおもしろい」（5件）、「ユーモア・笑いがあっておもしろい」（3件）などの意見もみられた。

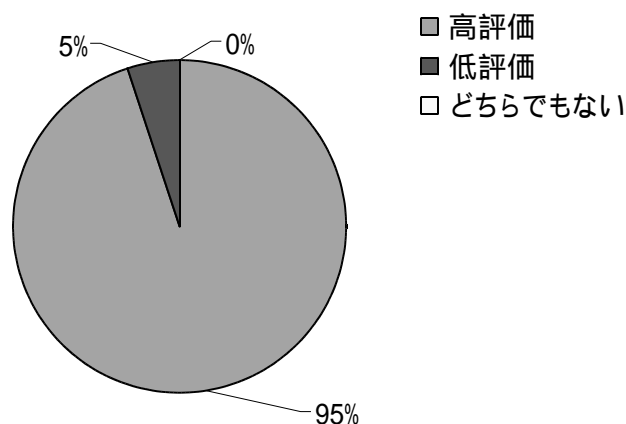


Figure 1 . 授業の感想から見た授業評価

考 察

本研究の第1の目的は、本来の担当教員ではないゲストスピーカーによる1回限りの講義の評価とその授業中の学生の自己評価との関連を検討することであった。また、第2の目的は、学生による授業評価と自己評価に男女差がみられるかを検討することであった。さらに、第3の目的は、学生が自由に記述した感想の内容分析から、良い授業、あるいは悪い授業の理由を探索することであった。

まず、対象となった授業の評価は、非常に高いものであった。同じ教員による14回の授業を評価した牧野(2001a, 2001b)における評価と比べても高い値であった。つまり、1回限りであり、しかも、授業実施者本人によらないアンケートにおいても、授業評価は高い値であった。また、学生の自己評価も非常に高い値であり、学生はまじめに授業に参加していたことがわかる。今回の授業における授業評価と自己評価の間には、弱い正の関連がみられた。また、自己評価の高い学生は、そうでない学生と比べて、授業を高く評価していた。これらの結果から、自己評価が高い学生ほど、授業を高く評価していたといえるだろう。つまり、授業にまじめに取り組んだ学生は授業を高く評価していた。この結果は、牧野(2001a, 2001b)とほぼ一致する。ただし、今回の調査では授業評価と自己評価の内容については詳細を検討していないため、相関関係は比較的弱い関連にとどまったと考えられる。

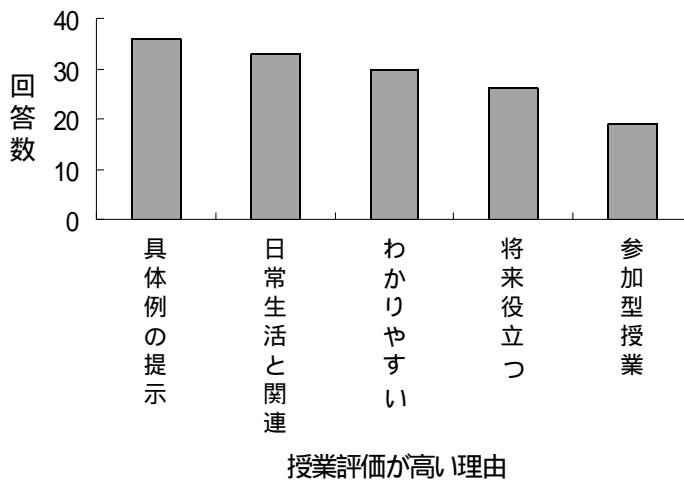


Figure 2 . 授業評価の内容分析

次に、授業評価に対する性差はほとんどみられなかった。これは、予想した結果であった。これは、男女いずれにおいても対象となった授業の評価が非常に高い値であったためと思われる。しかしながら、分析の結果、女子学生のほうが男子学生よりも、授業を高く評価する傾向がみられた。したがって、授業評価の平均値が低い授業においては従来どおり女性が男性よりも授業を高く評価するのかもしれない。また、自己評価には男女差がみられなかった。この結果も予想と一致するものであった。

さらに、授業の感想の内容を分析したところ、受講生の約9割が授業を高く評価していた。その理由は、「授業中、具体的な例をあげてくれる」、「授業内容が日常生活と関連している」、「授業内容がわかりやすい」、「授業内容が役立つ」など授業の内容とわかりやすさに関連していた。このことから、受講生である大学生が、授業内容を重要視していること、わかりやすい授業を期待していることがわかる。この結果は、量的な分析を行なった牧野(2001a, 2001b)と一致している。また、「先生が学生に質問をしてくれる」などの参加型の授業を望む声も比較的多くみられた。これは、大学の講義が教員から学生への一方的な形であることに不満を感じていることの現われであろう。自由記述の内容分析の結果は、牧野(2001a, 2001b)の調査で得られた知見を強く支持するものであった。また、現在の大学生が、わかりやすい授業を期待している点、日常に関連する内容を含む授業を求めている点、双方向的な授業を望んでいる点は、大衆化している大学において従来の授業スタイルからの変換が求められているといえよう。

本研究の今後の課題として、1回限りの授業評価と14回の授業後の評価との関連性の検討があげられる。本研究は、1回限りの講義で評価を行なった。その結果、授業評価は非常に高い値であった。この結果は、同様の教員が同様の形式で行なった牧野(2001a, 2001b)における授業評価とほぼ同様の値であった。従来、授業評価は、授業の最終回に行なわれ、14回程度の各授業を総合して行なわれてきたため、個々の授業の評価と総合評価との関連性は不明のままである。個々の授業の評価と総合評価との間には、高い正の関連が予想される。しかしながら、実際に、個々の授業の評価と最終的に行なわれる授業評価との比較を行ない、最終的な授業評価の妥当性を検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Elmore, P. B., & Pohlmann, J. T. 1978 Effect of teacher, student, and class characteristics on the evaluation of college instructors. *Journal of Educational Psychology*, 70, 187 - 192.
- Feldman, K.A. 1989 The association between student ratings of specific instructional dimensions and student achievement. *Research in Higher Education*, 30, 583 - 645.
- Greenwood, G.E., & Ramagli, H.J.Jr. 1980 Alternative to student ratings of college teaching. *Journal of Higher Education*, 51, 673 - 684.
- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8) - 福岡教育大学紀要, 42, 277 - 291 .
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 教養選択科目「社会心理学」の場合 高松大学紀要, 35, 1 - 16 .
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目「人間関係論」の場合 高松大学紀要, 35, 17 - 31 .
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1) 多変量解析を用いた因果モデルの検討 高松大学紀要, 36, 55 - 66 .
- 松田文字・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 121 - 130 .
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 141 - 148 .
- 大槻 博 1993 多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察 一般教育学会誌, 15, 47 - 49 .
- 住田幸次郎 1996 学生による「授業評価」に関する数量的分析 ノートルダム女子大学研究紀要, 26, 23 - 40 .
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986 学生による講義評価 一般教育学会誌, 8, 46 - 59 .
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989a 学生による講義評価 学生の質と講義評価の関係について 一般教育学会誌, 11, 56 - 59 .
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989b 学生による講義評価 成績と講義評価の関係 一般教育学会誌, 11, 99 - 102 .

高松大学紀要

第 37 号

平成14年 2月25日 印刷

平成14年 2月28日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064